

御幸町だより

No.151 2023年8月13日

京都御幸町教会

〒604-0933

京都市中京区御幸町二条下る
山本町434

TEL・FAX (075) 231-3441

『十字架につけられ給いしままなるイエス・キリスト』(8月に思うこと)

Ⅱコリント5章16～21節

牧師 村島 義也

「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」。ゲッセマネ、剣や棒を手にご自分を捕らえにきた者たちに抵抗を試みる者に語られたイエスの言葉。そしてイエスは十字架で死なれた。何故であるか。

「罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました」(21節)。何故であるか。コロサイ1:13～14、「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです」。この贖いと赦しについて、パウロは続けてこう解き明かす、〈神は御子の十字架の血によって平和を打ち立て、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました〉。「平和を打ち立て」というのだから神の強いアクションであり、それが御子なるイエスの十字架なのだということだ。剣を振るうことの対極の形で、神は平和の道を生み出して下さった。

そこで19節、「キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい」。使徒パウロはこれを宣教の根幹とした。そして今日、なお、全世界の教会は十字架の主を証し、和解の福音を宣べ伝え、これに奉仕する使命を負い続けている。

しかし我々は今、どのような世界を見ているだろうか。御子の十字架によって神が差し出しておられる和解の御手に、^{かえ}反って剣や棒で抗うような世の様があるのではないか。

最近、「2030年の分岐点」ということがよく言われる。あと10年に満たない期間で、世界の状況はのっぴきならない段階を迎え、その後の人類の運命が大きく分かれるという話だが、2030年というのも今やのんきな見方なのかもしれない。コロナのパンデミックは、もはや逃れようもなく世界が一体であることを露にした。温暖化(気候変動)も核や戦争の脅威の高ま

りも、同じことを示している。一致して地球を(未来を)守っていかねばならないのに、どうも現在のところ人類は逆を行っているような気がする。

現状を憂いつつ、思う聖書の言葉がある。ガラテヤ3:1に「目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示されたではないか」とあり〈改めて主の十字架を思い起こせ〉という勧告の文脈であるが、この箇所には青野太潮氏(聖書学者)の指摘により文語訳に光が当たった。文語訳ではギリシャ語原文が、現在完了形であることをが意識され次のようであった、「十字架につけられ給いしままなるイエス・キリスト、汝らの眼前に顕されたるに」。現在完了形は過去形と違い、過去の事柄が今もなお継続していることを表す。ありありと主の十字架を示すために、パウロはこのような表現をしたのではないか。

「十字架につけられ給いしままなるイエス・キリスト」～含蓄ある表現だ。キリストは永遠であられる故、一方において今や神の右に座し給う栄光の主であるが、同時に世の歴史の営みが許される限り「十字架につけられ給いしままなる」方。世界はなおもイエスの十字架の犠牲に保たれているのだ。もっと言えば、我々は世の罪と不義の成すあらゆる悲惨(痛ましき)の側に(ただ中に)「十字架につけられ給いしままなるイエス・キリスト」、この世を担っておられるそのお姿を思うべきではないか。

「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」。剣の政策やエゴイズムは未来に関する悲報でしかない。我々は、「十字架につけられ給いしままなるイエス・キリスト」において神が痛みをもって今も差し出しておられる和解の御手に(福音に)、世界がなんとか繋がっていけるようにと共に祈りたく思う。